

日本サッカー史シンポジウム

「中村覚之助と日本サッカーの夜明け」

日 時：2009年（平成21年）3月21日（土） 15:00～17:10

会 場：那智勝浦町体育文化会館 2F 大集会室

（和歌山県那智勝浦町大字天満 441-8、電話 0735-52-2340）

（交通）JR紀伊勝浦駅より車で3分、駐車場有

主 催：筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、日本サッカー史研究会

後 援：(財)日本サッカー協会、日本サッカーミュージアム、和歌山県サッカー協会、
紀南サッカー協会、熊野三山協議会、那智勝浦町教育委員会

協 力：ビバ！サッカー研究会、スポーツ文化研究会サロン2002、

NPO法人つくばフットボールクラブ、ホテル浦島、中村覚之助を顕彰する会

パネリスト：

森岡 理右（筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ会長、筑波大学名誉教授）

「高等師範学校フットボール部と日本のサッカー」

牛木 素吉郎（日本サッカー史研究会幹事、ビバ！サッカー研究会代表、ジャーナリスト）

「日本へのサッカー伝来と中村覚之助」

山本 殖生（熊野三山協議会幹事）

「熊野の神鳥、八咫鳥の意味と意義」

（司会）中塚 義実（筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ幹事長、サロン2002理事長）

<目 次>

開会挨拶

第Ⅰ部 プレゼンテーション

1. 日本へのサッカー伝来と中村覚之助（牛木素吉郎）
2. 高等師範学校フットボール部と日本のサッカー（森岡理右）
3. 熊野の神鳥、八咫鳥の意味と意義（山本殖生）

第Ⅱ部 ディスカッション

1. 八咫鳥とJFAのシンボルマーク
2. JFAマーク発案者・内野台嶺と中村覚之助
3. シンボルマークの由来は熊野の八咫鳥—JFAホームページの修正を！
4. 中村覚之助の業績—日本サッカー殿堂入りを！
5. 中村覚之助とサッカー、スポーツ、博物学
6. 師範学校におけるクラブ制度
7. おわりに

補足1. 高師卒業後の中村覚之助に関する推測

補足2. 中村覚之助が教鞭を執った清国山東省済南師範学校について

補足3. 協会標章をデザインした日名子実三のモチーフについて

開会挨拶

中塚義実（筑波大学附属高校教諭 茗友サッカークラブ幹事長 サロン 2002 理事長）

日本サッカー史シンポジウム「中村覚之助と日本サッカーの夜明け」に、ようこそお越しくださいました。いまから約2時間、中村覚之助の故郷であり、八咫鳥の故郷でもあるこの那智勝浦町で、思いを約100年前にぐぐっと戻して、日本サッカーのルーツを探る旅に歩いて参りたいと思います。

本日の司会進行役の中塚義実と申します。お手許のパンフレットをご覧ください。現在、筑波大学附属高等学校で保健体育科の教員をしています。昨日午後9時半ごろに東京池袋を出発しましてまる半日、バスに揺られて辿り着いたら目の前は大海原。すばらしいこの地に着くことができました。

パンフレットの中には、中村覚之助の略歴があると思います。ここにお集まりの皆様は、本日の主人公である中村覚之助についてすでに十分ご存知かと思いますが、覚之助の本家の当主でいらっしゃる中村統太郎さんに作っていただいた資料です。

明治11年5月にここで生まれ、明治33年、ちょうど西暦1900年ですが、高等師範学校に入学。その後、我が国のサッカーの本当の意味でのスタートとなることに取り組みされました。しかし覚之助は、若くして亡くなりました。明治39（1906）年7月です。それがあってかどうか、これまで中村覚之助の偉業については、もちろん地元では評価されていたのですが、なかなか中央の表舞台に出て来ることは少なかったのではないかと思います。

今回のこのシンポジウムの一つの大きな柱は、中村覚之助の人物像、すなわちどういった人だったのかを再確認し、再評価しようということです。そしてもう一つの大きな柱が、八咫鳥と、日本サッカー、ここ熊野の地、あるいは中村覚之助との関係を明らかにしようということです。今回のシンポジウムは、このような二つの柱で構成されています。

このような主題に最もふさわしい演者の方を、各方面よりお招きしております。それでは順に紹介させていただきます。

まず、今回の企画の実質的中心として、準備段階から動いてくださった牛木素吉郎さんです。お手許のプロフィールからもおわかりのように、サッカージャーナリストであり、今回の主催団体の一つである日本サッカー史研究会を主宰されています。本日は「日本へのサッカー伝来と中村覚之助」というテーマでお話いただきます。牛木さん、どうぞご登壇ください。

続きまして、森岡理右さんです。筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブの会長を務めておられます。私が学生のころは蹴球部長をされており、そのころから大変お世話になっています。今日は「高等師範学校フットボール部から現在まで」というテーマでお話いただきます。どうぞご登壇ください。

そして、地元新宮市教育委員会学芸員、熊野三山協議会幹事でいらっしゃいます山本殖生さんです。地元の方はご存知だろうと思いますが、八咫鳥研究の第一人者とお聞きしております。今日は「熊野の神鳥、八咫鳥の意味と意義」というテーマでお話いただきます。よろしくお祈いします。

本日の進め方ですが、はじめに各演者からだいたい20分くらいずつ、それぞれのテーマに沿ったお話をいただきます。質疑の時間は後ほどまとめて取りますので、最初の60分間は皆さんひたすら話を聞いていただく時間になります。後半1時間を、全体を通してのディスカッションの時間といたします。状況を見て進め方を考えますが、最初にも申しあげたように、2つの大きな柱、中村覚之助とはいかなる人物だったのかという部分と、八咫鳥とここ熊野、および日本サッカー界との関係を、それぞれ前半部分、後半部分に分けて、フロアの方から補足や質問をいただきながら進めて参りたいと存じます。

それでは、最初の演者であります牛木さん、よろしくお祈いいたします。

第 I 部 プレゼンテーション

1. 日本へのサッカー伝来と中村覚之助

牛木素吉郎 (サッカージャーナリスト 日本サッカー史研究会幹事)

シンポジウム企画のきっかけ

皆さん、こんにちは。東京で日本サッカー史研究会を開催しております。これは日本サッカー協会が協力してくださって毎月一回やっています。その他に仲間を集めて、研究会というと本当に勉強しているのかと思われると思うのですが、実はちょっと話をして後で延長戦と称して居酒屋に行くためにやっているような会を主宰しております。

たまたま一昨年だったと思いますが日本フットボール学会に出たときに、今日ここにもお見えになっている岐阜の篠田昭八郎さんが中村覚之助さんのお話をなさったのです。日本サッカー史研究会のテーマとしてちょうど欲しいところだったので、中村覚之助の本家のお孫さんである中村統太郎さんと篠田先生に来ていただいて、研究会でお話をしてもらったことがあるんです。その後の延長戦で飲みに行きまして、一度那智勝浦に行ってお話を聞きたい、また中村さんのお宅も訪ねてみたいと申し上げました。それが発端であります。

11月にやろうと思ったら、中村統太郎さんが11月は台風が来るからダメだと言われまして、3月は台風も来ないし暖かかくていいだろうと思って来ました。桜にはまだちょっと早かったようです。でも、きょうは午前中、中村覚之助さんのお墓にお参りしまして、まあ立派なお墓なんですよ。なかなか由緒ある墓地があって、その中でひとときわ、墓石の高さが高いんですね。亡くなったのが明治39年で、しかも本家の弟さんだというお話です。なんであんなに大きなお墓が特別に建っているんだろうと思ったんですが、これは東京高等師範学校を卒業して中国山東省に赴任している途中で亡くなったので、国のために特に功労があったというので功労金が出て、それでお墓も立派なものが建てられたのではないかというようなお話でした。

墓地の隅っこの方にはもう少し高くて大きなものがあって、それを見たら戦争に行つて戦死された方なのですね。昔は戦争に行つて亡くなるというのは大変なことだったんですが、人数としては少なかつたんです。だから、戦死すると大きなお墓が建てられたんです。太平洋戦争にいった方たちは本当に気の毒です。あんまりたくさん亡くなっていますから、大きなお墓なんか建てられません。みんな一緒に忠魂碑になっています。戦争のない時代になって、あまり病気もない時代になって、ここにこうやって非常に景色のいいところでお話出来るのは幸せだと思っています。

三つの趣旨

この那智勝浦に来てお聞きたいと思ったことが三つありました。

まず中村覚之助という人についてです。調べれば、しらべるほど、この方は日本のサッカーにおいて一番重要な役割を果たした人だということをだんだん私は感じるようになって来ました。

日本サッカー協会に日本サッカー殿堂というものがある、日本のサッカーで功労のあった人のレリーフを作って掲額しています。そこに中村覚之助を入れるべきであるという運動をやりたいのです。だけれど、もし那智勝浦の皆さんが東京に行つて入れてくれ、入れてくれと言ったら売り込みに来たんじゃないかと思われまふ。逆に我々がこちらに来て調べて、調べた結果この人は本当に偉い人だということを言つた方がずっと説得力があるんじゃないかと思ひます。今回、私たちを受け入れてくださった方にはいろいろとご迷惑をかけているわけですが、我々がこちらに来た方がいいと考えたわけ

です。それが、一番大きな目的です。

次に、それに関連して、日本にサッカーというスポーツを本当に紹介したのは誰かということをはっきりさせたいと思っています。この点が、実ははっきりしていない。でも、いまのところ私が調べた範囲では、やっぱり中村覚之助を「日本のサッカーのはじまり」とするのが適当ではないかと思います。その点についても、いろいろな方のお話も聞きたいということがあります。

三番目は、先ほどお話のあった八咫鳥の話です。日本サッカー協会のマークは三本足のカラスです。だけど、何で三本足のカラスが日本サッカー協会のマークになったかということは、まったく分からないのです。どうやって調べたらいいのかも分からないのですが、いろいろな人の話を聞いているうちに少しはヒントが得られるのではないかと、しかも熊野は言わば八咫鳥の原産地みたいなものですから、ここで八咫鳥について勉強したいと思っています。

私たちの年代の者にとっては、実は八咫鳥は、なじみ深いものです。私が子どものころは、小学校の教科書にはちゃんと八咫鳥の話が載っていました。熊野で神武天皇の道案内をしたという話です。最近では八咫鳥がいたるところにあって、三本足の鳥が日本中にいます。東京の新宿の周辺だけでも熊野神社が二社あって、そこでも八咫鳥のサッカーのお守りを売っているのです。だけど、本家本元を訪ねなければ話にならないだろうということで、熊野への旅を計画しました。

中村覚之助さんが、サッカーを本格的に紹介したのは東京の高等師範学校です。今は筑波大学になっているのですが、その筑波大学のサッカーの親分みたいな（森岡先生）がきょうは私の隣にいます。その話は森岡先生にさせていただきます。八咫鳥の方は、もちろん地元の山本さんがご専門ですからお話をさせていただきます。そこで今日の私の持分では、中村覚之助を日本サッカー殿堂に入れるべきだということを中心に最初にお話をしたいと思います。

サッカー殿堂について

日本のサッカーの殿堂について、すこし説明しておきます。野球の殿堂というのがあります。これは東京の水道橋にある後樂園、東京ドームの野球体育博物館にあって、野球界の優れた功労者を毎年、数人ずつ選んで像を作って飾ってあります。もちろん像が大切なのではなくて、その人の功績を留めることが大切なわけです。それを真似してサッカーも4年前からサッカー殿堂というものを始めたのです。これは野球と違って日本サッカー協会自身がやっているのです。日本サッカー協会のビルの中に日本サッカーミュージアムがあります。そこに掲額して表彰する人を選ぶために、協会の委員会として殿堂委員会があります。サッカー界の長老の役員と古手のジャーナリストを集めて委員にしています。私もその一人でした。

選び方は競技者表彰と功労者表彰に分かれています。競技者表彰は、有名な選手だった人のなかから選びます。委員会が作った候補者のリストの中からジャーナリストや日本サッカー協会の役員など120人くらいの投票権を持つ人が投票をします。たとえば、1964年の東京オリンピック当時選手だった以降の人たちを対象に、殿堂委員会が予め候補者を決めて経歴などを書いたものを配って、投票してもらって選びます。これは競技者、プレーヤーが対象です。

1963年以前の選手だった人、役員として功労のあった人、審判として功労のあった人、ジャーナリストで功労のあった人、その他いろいろと功労のあった人の中からも毎年選んでいます。それは殿堂委員会が選んで推薦します。一度に大勢選ぶと新聞にもほとんど載りませんから、なるべく少数ずつ選んでいこうというのが私の主張でした。いろいろ議論はあったのですが、いまは年に4~5人ずつ選んでということになっています。

最初のときに日本サッカー協会の側の意向として、表彰は日本サッカー協会設立以降を対象にするといってきました。創立当初は大日本蹴球協会という名称です。大正10(1921)年の大日本蹴球協会設立以前の人は選ばないといってきたのです。そこで私は殿堂委員の一人として反対しました。サッカー協会ができる以前にも、サッカーそのものを日本に広めるために尽力した人がいたし、協会を作

るために尽力した人がいる。その人たちも入れようじゃないかと主張して、ちょっと揉めました。

とりあえず、この人はどうしても入れてくれと言ったのが、坪井玄道という人です。坪井玄道は明治35（1902）年、ヨーロッパとアメリカに体育の視察に行つて、いろいろなスポーツを学んで日本に伝えました。たとえば、卓球も坪井玄道さんが日本に伝えたといわれています。彼が持って来たいろいろなスポーツの中にフットボールがあるのです。坪井玄道さんがそのとき持って帰つたフットボールはサッカーだったのです。13 くらいのスポーツの資料を持って帰られたというのですが、その中のいくつかを選んで、日本の学校教育の中でとりあげることにしました。そのなかで一番重視されたのがサッカーだったんです。サッカーは全身運動である、戸外でやる、それからチーム競技である、日本の若者たちの体と心の両方を鍛錬するのにもっとも適当なスポーツである、ということをおっしゃって、特にそれを広めようと考えました。

坪井玄道さんは日本にサッカーを紹介した人なのだから、ぜひ殿堂入り選考の対象にしてくれと主張しました。いろいろ、いきさつはありましたが、最初の殿堂入りの中に入りまして、協会設立以前の人を入れるという先例を作りました。

先例ができたから、サッカー協会ができる以前の人も、これからは対象にするということで、何人か入っています。例えば、去年殿堂入りしていただいたヘグさんです。大日本蹴球協会を作るのに尽力をした英国人ですが関東大震災で亡くなっています。そういう人を忘れられないうちにということで入れてもらいました。

中村覚之介の功績

そうすると次は、本当は中村覚之助さんだと、私は思っているのですが、東京では案外、知られていない。日本サッカー協会の役員の中でも知られていない。特別功労者は投票でなく、殿堂委員会を選んで日本サッカー協会理事会に承認を求めます。日本のサッカーを近代化した非常に功労のあるチョウ・ディンというビルマ人がいます。その功績は明らかで、本などにいろいろと書かれています。殿堂委員会でその人を選んで推薦したら、保留になったことがあります。協会の首脳部であっても、必ずしも、むかしのことを知っているわけではありませんから、十分に理解してもらえよう説明する必要があります。チョウ・ディンの場合は次の機会にもう少し詳しい説明を書いて出して承認されました。

いま、中村覚之助を推薦したら同じようなことが起こる可能性が非常にあるので、中村覚之助さんの功労をもう少し明らかにし、かつ広めてから推薦した方がいいのではないかと考えています。そのためにはまず実績を作らなければならない。地元に行つていろいろ調べて、シンポジウムをやって、その報告書を作って印刷して、日本サッカー協会のかたに見てもらふのが必要なのではないかと考えています。それが、このシンポジウムを計画した目的です。

なぜ、中村覚之助が偉大かという、まず一つには日本でサッカーを本格的に体系的に紹介したのが中村覚之助だからです。私はそう思っています。坪井玄道さんは、日本に本格的なサッカーを紹介しました。でもそれは英国のサッカーの本を持ち帰つたということなのです。また、それを坪井さんに指示してやらせたのは、当時、東京高等師範学校の校長で、柔道の講道館を始めた嘉納治五郎さんです。この人たちは偉い人で有名な人ですが、サッカーの日本への導入を実際にやったのは中村覚之助だった。まず偉い人を入れるというのは世の中順番で仕方がないのですが、次には実際にやった人を入れるべきではないか。それは中村覚之助だというように私は考えるのです。

中村覚之助は、サッカーを全面的に、本格的に、系統的に日本に紹介しました。それは、どういうことかと言いますと、まずサッカーという言葉から説明しなければいけません。サッカーという言葉は俗語で、もともとの名称は「アソシエーション・フットボール（Association Football）」です。アソシエーションは「協会」という意味です。19 世紀にイギリスではいろいろなフットボールがありました。フットボールですから足でボールを蹴るわけですが、足だけでなく手で持つことのできるフット

ボールもありました。蹴ることは蹴るのですが手で持っても良いというようにいろいろなフットボールがありました。それは、大まかに言うとイギリスのいろいろなパブリックスクールごとに行われていたんです。

パブリックスクールは、日本の中学校にあたるか、高等学校にあたるかというふうにはうまく説明できませんが、年齢の若い子からかなりの年配の、いまの日本で言えば高校生ぐらいの子供まで入っている学校なのです。パブリックというと公立だと思われそうですがそうではなくて、パブリックスクールとはみんなの学校という意味であって私立なのです。有名なのは、「ハーロー」とか「イートン」とか「ラグビー」とかの学校があります。そのそれぞれの学校でいろいろな形のフットボールをやっていて、全部ルールが違うんです。学校は全寮制ですから、寮と寮との対抗試合というような形で行われていたので、ルールはその学校の中でわかっていればよかったです。

明治初期のフットボール

ところが、だんだん交通が発達して来て、鉄道ができたりするようになると、よその学校とやろうじゃないかということになる。そうするとルールがバラバラでなかなかうまくいかない。それでルールの統一が問題となって、1863年にロンドンでいろいろなチームの人が集まって会議をやってルールの統一をしました。ルールの統一をして、「フットボール協会 (The Football Association)」を作ったわけです。協会の名称は、「The Football Association of England」とか「The English Football Association」というようにはなっていません。他の国にはまだないのだから、特別に「イングランドの」つける必要はなかったわけです。いまは世界各国にサッカー協会がありますが、イングランドは今でも頑固に「English」とか「England」とは付けていません。

ともあれ、その「フットボール・アソシエーション」で統一されたルールによるフットボールが「協会式フットボール」ということでアソシエーション・フットボールとなったわけです。

その「Association」の「soc」の語尾に「-er」をつけた「soccer」というのが若者たちの間で、このスポーツを呼ぶ愛称になりました。日本ではフットボールの訳語としては「蹴球」と呼ばれていたのですが、戦後になって「蹴」の字が常用漢字に入っていないので、新聞などで「蹴」が使えないために「サッカー」が一般的になりました。サッカーはアソシエーション・フットボールのことで、いろいろな種類がある「フットボール」の訳語としては使えません。

余談ですが、来年には「蹴」の字が常用漢字表に入りそうなようすです。そうしたらまた「蹴球」を使うことができるし、「蹴る」という言葉も新聞で使えるようになります。

さて、イギリスでルールが統一されて協会ができたのが1863年なのです。いまの日本のいろいろなサッカーの本に、サッカーが日本に入って来たのは明治6(1873)年、築地の海軍兵学寮、戦争中であれば海軍兵学校、いまで言うところと海上自衛隊学校のようなところにイギリス人のダグラス少佐が来て教えたのが最初だと書かれているんです。あるいは、日本に入って来たとは言えませんが、その当時の横浜や神戸の外国人クラブで在留外国人同士がサッカーをやっていたと書かれています。

しかし、私はこれは間違いだと思います。当時のフットボールのようすを描いた絵があるのですが、サッカーみたいでもあるし、ラグビーみたいでもあるのです。サッカーの絵だと紹介されているある絵には、たとえば向こう側に富士山があつて丸髷(まるまげ)を結った女性が見物しているところで、スクラムを組んでいるんです。だから、これはラグビーじゃないかと言う人もいます。一方で、スクラムを組んでいるのだけれどゴールキーパーがいるという絵もあります。ですから、当時おこなわれていたのはサッカーでもラグビーでもないのだと思います。

サッカー協会ができたのが1863年ですから、明治6年まで10年くらいしかたっていないわけです。ロンドンの片隅でできたルールがその間に日本まで伝わって来たとは思われない。ましてや、ダグラス少佐が若いころにやったフットボールがサッカーであったはずはないのです。それは、ダグラス少佐が在学していた学校のルールのフットボールであつたに違いないんです。

もちろん、ラグビーでもない。イングランドに協会ができて、ルールが統一されたとき、パブリックスクールのラグビー校のフットボールをしていた人たちは、統一ルールに反対して、協会に参加しませんでした。その人たちが集まってラグビー・ユニオンを作ってラグビーのルールを統一したのは、その10年後の明治4（1871）年です。それが明治6年に日本に入って来ているわけではないんです。

ユニオン・ラグビーという、いま日本でされている15人制のラグビーが日本に入って来たのはずっと後で、英国留学から帰国した田中銀之助が友人のクラークとともに、明治32年（1899年）に慶応義塾ではじめたとされています。

『アソシエーション・フットボール』の出版

明治初期に行われたものはラグビーでもサッカーでもない。いろいろなルールがあったフットボールの中で、外国人たちが集まって相談して、そのつどルールを統一してやっていたのではないかと想像されます。想像されるだけでなく、実際横浜で発行された居留民の新聞などには記録が残っています。横浜の外国人居留地で慶応2年（1866年）にフットボールクラブが結成されたという記録が残っていますが、そのときはもちろんみんな相談してルールをその場で決めていたのだらうと思います。

1870年代以降に入ってきたもので、いろいろな文献に残っているのを見ると、サッカーに近いフットボールはあります。それから体育の教科書などにも教材としてフットボールが載っています。それらはみなフットボールあるいはフートボールと書いてあって、サッカーともラグビーとも蹴球とも書いてありません。

それでは、協会ルールによるフットボール、つまりサッカーが、いつ、誰によって日本に入ってきたのでしょうか？ サッカー競技の全体像が本格的に日本に紹介されたのは、中村覚之助が翻訳、編集して、高等師範学校から出した『アソシエーション・フットボール』が最初です。これは坪井玄道さんの持って帰った英語の本を、中村覚之助が翻訳して編集して書いた本です。だから、中村覚之助を、サッカーを日本に本格的に紹介した最初の人物としていいと思います。中村覚之助が作った本がこれなのです（聴衆に見せる）。これは原本ではなく復刻版です。『アソシエーション・フットボール』と書いてありますから、これはサッカーであることは疑いの余地はまったくない。そして、最初に坪井玄道さんの序文とともに、この本では中村覚之助さんが小石川において明治36年秋に書いたという序文が載っています。このフットボール（サッカー）は若者の教育のために良いということが最初の方に書いてあります。こういう本を作ったのだから間違いなく中村覚之助さんが中心人物である。だから、中村覚之助さんをサッカー殿堂に入れるべきであるというのが私の意見なのです。

また改めて中村覚之助さんのことを取り上げる機会があると思いますが、今日はまずはこれだけにしておきたいと思います。

（中塚）ありがとうございました。時間が限られている中で、中村覚之助を特別功労者として掲げべきであるというところまでお話いただきました。レジュメではこの後に「中村覚之助の人物像」が続きますが、この部分は後半のディスカッションで再び掘り下げていただければと思います。

いまの話にもありますように、高等師範学校の中村覚之助さんが1903年に『アソシエーション・フットボール』という本を書かれ、翌年、横浜外人クラブとサッカーの試合を行いました。これが、日本人が正式にサッカーの対外試合をした最初だと言われています。そのことが新聞でも取り上げられ、各地の学校から、この新しいフットボールを紹介してくれという打診が東京高等師範学校に来るようになります。そのあたりから、東京高師の使命という話になってくるかと思います。

2番目の演者の森岡理右さんには、そのあたりから、「高等師範学校フットボール部から現在まで」というタイトルでお話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

2. 高等師範学校フットボール部から現在まで

森岡理右（筑波大学名誉教授 筑波大学蹴球部同窓会若友サッカークラブ会長）

高師フットボールのはじまり

本来私はマイクフォンはいりません。横が 68m、縦が 105m のサッカーフィールドで学生を大声で絞り抜いていましたのでいらないのですが、今日は記録を取るようですからマイクを使います。私の話はときどき外へはずれるので、そのときは記録を外してください。

牛木先生の後で引き受けるのは、「高等師範学校フットボール部から現在まで」です。学校の歴史は 140 年くらいですが、サッカー部の歴史は 113 年目。中村覚之助さんが在籍されたのは 102~3 年前だと思えます。いま牛木さんが言われたように、彼こそ日本のサッカーの祖であると言えるでしょう。中村さんはじめ高等師範の学生たち、あるいは教官たちが残したサッカーにかかわる、さまざまなこと、現在までの 102~3 年目の筑波大学蹴球部がどのように歩んだかを、きわめて簡単に申し述べさせていただきます。長くなりますと、歴史が長いだけに大変なことになります。

ここに（見えますか？）東京高等師範学校蹴球部の活動と指導の足跡に関する研究があります。これは、今年卒業する学生の卒業論文です。240 名いる体育系の学生の中で最優秀賞をとりました。中塚先生の高師の教え子です。筑波大学附属高校の出身で筑波大学に来ました。明後日卒業式です。

この男、実は日本航空のパイロットになります。すでに 3 月中旬から伊丹へ行ってトレーニングを受けています。3 年後には操縦桿を握り、日本航空の飛行機運転手になります。筑波の卒業生でパイロットになったのは、そのほかに 4 人おられます。彼は 5 人目になります。皆さん、これから日本航空に乗るときは気をつけて下さい。受付で必ず「今日のパイロット、まさか筑波大サッカー部の卒業生じゃないだろうな？」と確かめて下さい。「そうだ」と言ったら、即座に乗り換えて下さい。私は保証しません。冗談です。ですが、その男が書いたのは、大変立派な、我々の先輩、高等師範学校のサッカー部の歴史についての研究論文です。もちろん中村覚之助のことも出て来ます。

きょう私は、3 つに分けて簡単に話をしたいと思います。会場の後ろは非常にきれいな海ですね。これは那智湾ですか？ ついこの間まで鯨が泳いでいたのではないかと思うのですが、以前の捕鯨基地、太地はこのちょっと隣みたいですね。今は穏やかですね。でも私は鯨食べたいとは思いません。

そもそも高等師範、これは中等学校等の教員を養成する目的のために作られた学校なのです。昭和 24 年から新制に変わりましたが、それ以前の学校に在籍した方、ちょっと手を上げていただけますか。牛木さんも在籍しましたね。いま 75 歳ぐらいから上の方は、旧制の学校に在籍したことがあると思えます。旧制は小学校だけで、その後は新制に変わった方が大部分だと思えますが、その上にあった旧制中学、あるいは旧制女学校、この教師を養成するための学校が高等師範であったわけです。

中村覚之助さんは、和歌山師範を出て高等師範へ来ました。その他、旧制中学を出て高等師範へ来た学生もいました。田舎から来る人は元気一杯なのですが、都会から来る学生たちは非常にひ弱でした。これじゃだめだと。当時は全員寄宿舎生活です。中等学校の教師たる者、身体壮健でなければ生徒になめられる、ときには生徒にはじかれるだろう。だから、もっと体を鍛えろ、というのが嘉納治五郎校長の考えでありました。そして明治 29 (1896) 年、「運動会」を作りました。これは、高等師範の生徒全員が加入しまして、8 つの部に分かれて毎日 30 分ずつ体を動かさないという目的だったのです。そのときにフットボール部という名前が誕生しました。その前は弓とか自転車とか剣道あるいは柔道という個人競技の中で、やっと一つだけフットボール部ができたのです。

これは、牛木さんが言われましたように団体競技ですね。それ以外は全部個人競技です。日本は古来、武道がありますから、個人の鍛錬の方法とすれば、柔道、剣道などいろいろありました。鎖鎌な

んていうのもあったと思います。そうではなくて、もっともっと全体で楽しんでやれるもの、それにはフットボールが一番だというので生まれたのだと思います。

4～5年そのまま来ましたが、明治35年になって変わりました。いまの各高等学校、大学等々で行われている部活動、クラブ活動という形に変わったわけです。それまでは、1人で3つも4つもやって体を鍛えていましたが、そのころからは、一つの部に属してみっちりとそれを練磨するというふうになったのだと思います。そのときに中村覚之助さんが最上級生で在籍していて、クラブのリーダーでした。それまでは寄せ集めの運動好きの集団、あるいは運動しなければいけないひ弱な学生の集団であった運動会から、「校友会」に変わって蹴球部という名前になったのだと思います。これはいまでいう普通のクラブ活動だと思っていただければいいです。そのときに坪井玄道先生から言われて、英語の本を日本語に翻訳した、これが『アソシエーション・フットボール』で、まさしく中村覚之助さんがいなければできなかった本ではないかと思います。高等師範の130余年、運動部は112年ですけれども、それを略して5分で申し上げました。

高師蹴球部以来の理念

ここ（黒板）に書きました。これは現在でも筑波大学蹴球部に流れている理念です。

「我が部はこの技の研究により自己の心身の修養に努めるのみでなく、進んで大いにこれを中等諸学校に伝え、以て生徒の体育の指導者たらんことを目的とする」

この出典もあります。この中にはちゃんと書いてありますけれども、あまりに多いのでやめておきますが、中村覚之助さんの直接の言葉であると思います。この心を現在でも我々は持って、100年を超える歴史の中で進んで来たわけです。

この会場に、私の先輩と私の一期下の後輩が来ています。それぞれ大学の教師でした。司会者の中塚君、そして学生が一人、後ろの方に紛れ込んでいます。この心は言わずとも覚えましたよね、どうですか？ こういうのを文章で見たことないよね。先輩たちから口伝で、俺たちはこういう使命を持った集団であるぞと聞いたかと思えます。そうですね、岐阜の篠田さん？

（篠田）先輩から体では教わりました。

（森岡）殴られた？

（篠田）一回も殴られた経験はありません。我々が1年生のときに下級生を殴った3年生が正座させられて叱られていました。犬や猫でも殴れば言うことを聞く、お前らは教師になる身でなぜ殴ったのかと上級生が叱られていました。私たちは、お前ら下級生はあっちに行けといわれました。教育者として、いまだに、それが頭に残っています。

（森岡）私は部長時代、竹刀（しない）で36発、気合を入れるために尻に当てました。その当時の学生も、きょうは高知から来るはずでしたけれども。（来ています）。お～いるいる。今でも尻にあざがあるのではないかと思います。なぜやったかという、下級生に悪さをしたからです。愛の鞭（むち）ですね。体罰ではありません。君は私にやられて一人前になったのだな？（はい！）

確かに高等師範のサッカー部のことを書いたものはいろいろと出て来るのですけれども、だいたい、いまの学生はものをあまり読みませんから、口伝が一番、これ（愛の鞭）が二番という育て方をされて来ました。いまはさすがにこれもないですけどね。私も殴ったのではなくして、彼の尻にあざを付けてやった、彼の太ももの筋肉の鍛え方がどれほどかと思って試した36発です。竹刀は折れましたが、太ももの筋肉は大丈夫でした。3年間あざが消えなかった、とのちに言われましたが…。

赴任する先々にゴールポストを

我々のこの100年余を貫く理念、我々のやるべきことは黒板に書いた通りです。むかしの高等師範、それから東京教育大学の生徒たちのほとんど90%くらいが教師になりました。合言葉は、赴任する先々にゴールポストを立てよう。これはサッカーの普及と、その普及によって自分が教える生徒たちの心身の練磨を手助けしようという志で、いまも変わっておりません。

1996年に創部100周年の記念事業をやりました。東アジアから大学を10校呼んで、筑波大学の校庭で試合をしました。勝った負けたは関係ない親善試合です。もちろん祝賀会もやりました。その時点で、高師以来の卒業生が約1,300人おりました。この1,300人のうち、歴史は33年である筑波大学の卒業生が900名ぐらいおりました。修士号、博士号を持っているのが大体100名です。それからJリーグの現役選手が30名おりました。和歌山大学にも卒業生がいるのですが、北海道から沖縄まで、大学や高校の教師が約400人です。和歌山県サッカー協会とか三重県サッカー協会のような協会の仕事をしている者が70名ほどおりました。要するに、筑波大学出身者あるいは東京教育大学出身者、一部の高等師範学校出身者は、あまりいばるわけにはいきませんが、サッカーの現場における一大勢力で、私たちの誇りであります。

牛木さんは東京大学出身ですね。東京大学出身者は政界、官界、財界どこにでもいます。中にはローマかどっかで居眠りしながら記者会見した大臣、彼も東京大学です。しかし、サッカー部出身者で卒業後もサッカーの現場で活躍しているのは多くないと思います。新聞記者はいるのです。牛木さんも記者生活50年。私も昔は同じ記者でした。プロレスと相撲の記者だったのです。早稲田大学出身者でもサッカーの現場で働く人は少ない。慶應義塾大学でも少ない。あまり宣伝しても良くないのですが、我々筑波大学出身者が一番多い、というふうに進んで来ております。

話を戻しますと、中村覚之助さんは、我々1,300名余に及ぶサッカー部出身者の大先達としてぜひひ日本サッカー協会の殿堂に入れてほしい、また入れなければいけない人であるということを確認いたしまして、私は酒飲むのはうまいのですが話すのはあまり上手ではなくて申し訳ないのですが、とりあえず私の報告はそういったところです。

(中塚) どうもありがとうございました。今の森岡先生の話をお聞きしていて、学生のころもよく聞いた話だなというふうに思い出しました。筑波大学蹴球部には規約がないのだ、規約がないけれども共通の理念でずっとここまで来ている部なのだと。ではそのルーツは、となると、中村覚之助のところはどうやらたどり着くのかなと。そのあたりがじょじょに明らかになって来ているかなと思います。

(森岡) 筑波大学蹴球部には規約はないのです。申し合わせだけがあるのです。スポーツマンに悪影響を及ぼす煙草は吸うな、だけだな。学生とすれば大学の規約とかある。社会人とすれば日本の法律、社会常識があるじゃないですか。規約とはだいたい破られるためにあるのだと思うのですね。だからいらぬ。それよりも一般的な常識、良識で自分たちを律すればいいのではないか、というのがずっと続いて来た我々のクラブの伝統だと思います。付け足しました。

(中塚) ありがとうございます。では、ここで中村覚之助の人物像とはまたちょっと離れて、おそらくどこかでまた中村覚之助の話とオーバーラップしてくると思うのですが、この熊野、那智勝浦はものすごく由縁のある八咫鳥というところに視点を移したいと思います。

山本殖生さんには「八咫鳥の意味と意義」の話をいただきます。資料もございます。では、山本さんよろしく願います。

3. 熊野の神鳥、八咫鳥の意味と意義

山本殖生（新宮市教育委員会学芸員、熊野三山協議会幹事）

三足鳥のさまざまな文物

山本です。大変面白い話のあと、暗闇で煙に巻いたようなお話をさせてもらうのは大変恐縮なのですけれども、少しの時間でですからお付き合いいただきたいと思います。

まず八咫鳥っていうのはどこから飛んで来たかという話ですが、中国の『淮南子』（えなんじ、B.C.179～122）の中に日中に駿鳥（しゅんう）がある、つまり三本足のカラスがあるという資料が出て来ます。これは紀元前の資料ですから、かなり古いわけですね。そういった中国の伝承が日本に入って来たんだらうということです。やはり中国でも皇帝のシンボルとして敬われるというようなことがあったみたいで、古い英語の辞書なんかを見ますと、日の出の太陽と日中の太陽と夕日の太陽、その三本線を象徴的に示しているのが三本足のカラスなんだということが書かれています。日の中には鳥がある、太陽の中に鳥があるという伝承が世界的に分布する。その中でも中国がもっとも古いのらうということです。

高句麗の古墳壁画にも現れて来ます（五塊墳第4号墓、6世紀）。確かに太陽の中に三本足の鳥を描いた古墳の壁画があるということです。やはり、これは宇宙観と言いますか、人間死んだら太陽とお月様に守られてあの世に行くんだみたいな信仰があるのらうと思います。

それが日本に入ってきました。九州に珍敷塚古墳というのがあります。これは6世紀の後半ぐらいですが、太陽と船に乗った鳥、おそらくこれがカラスなのでしょうね、そういったものがデザインされていくことになります。

有名なキトラ古墳（7世紀末）にも三本足のカラスが出て参りました。これは10年近く前ですか、ちょうど日韓ワールドカップの前だったと思います。発見されてびっくりしたのですが、そういった形で古墳に描かれるということです。

有名な玉虫厨子（7世紀中頃）にも三本足のカラスが出て来ます。ちゃんと三本足の鳥が描かれているのがわかります。

正倉院の宝物の中にも三本足のカラスが出て来ます（桑木阮威満月形）。琵琶の飾りの中にカラスをデザインしたということです。

オビジャというのは「民俗例」で、現代でも行われている民俗行事です。太陽の中にカラスが住んでいるので、それを弓で射るとということです。この浜ノ宮周辺にも弓の行事が多いですけど、こういう行事はやってないみたいですね。これは非常に面白いと思います。要するに、古い太陽を弓で射殺してしまって新しい太陽を迎えるという新年の行事なのです。そういう太陽信仰がわかると思います。

三本足のカラスは八咫鳥

それでは、次にいきたいと思います。神武東征と朝廷の八咫鳥信仰ということです。有名な神武天皇が熊野に回り込んで来て、熊野から八咫鳥の導きで日本の国を開いたという伝説が、『古事記』、『日本書紀』に出て来るわけです。「朕、今頭八咫鳥を遣し」と、頭八咫鳥と書いてあるのが面白いところです。この八咫鳥ですが、「八咫（やた）」というのは大きいとか奇怪なというような意味なのらうと思います。要するに、大陸から伝来して来た三本足のカラスが八咫鳥というイメージで『日本書紀』には登場して来て、それが日本の国を開いたということが重要なんです。

熊野に回って来た。なぜ熊野に回って来る必要があったのか。遠いのに。これは太陽を背にして日本の国を開くというシナリオが必要だったわけです。日本の国は、「日本（にっぽん）」というくらいで、太陽信仰、天照大神を皇祖神として祀っているわけですから、そういうシナリオを作っていく必

要があった。そういう中で、熊野というのは重要な位置付けができる。それを先導したのが三本足のカラスの八咫鳥なのだとということです。

こういった三足鳥というものが非常にめでたい鳥として、『延喜式』（927年）に出て来ます。上端三十八種のうちの一つとして、三足鳥、日之精也ということが書かれていますから、めでたい鳥でもあるのだということです。

三足鳥というのがまさに八咫鳥のことなのですよというのが『倭名類聚鈔』（10世紀前半）という史料の中に出て来ます。三足鳥イコール八咫鳥ということが昔から言われていたということです。

朝廷の正月の儀式でも鳥形鐘というものを立ててお祭りするということが、『続日本紀』（701年）に書かれています。日本の皇室というのは太陽信仰そのもの、そのシンボルが三本足の鳥、八咫鳥なのだとすることで、朝廷の儀式でもちゃんとこういうことをやっているわけです。

天皇の即位式にも銅鳥幢と日像幢という三足鳥をあしらったポールが立てられました（『文安御即位調度図』）。『明正天皇御即位図屏風』には、中央に三足金鳥、右側に金盤中の三足鳥が見えます。左側にはお月様の中うさぎが出て来たりしています。

まさに皇室に信仰された重要なシンボルとして、三本足の鳥、八咫鳥があるのだということです。天皇の即位礼では必ず「袞衣（こんりゅうい）」という特別な着物を着ますが、それには八咫鳥が付いています。最近それをやめてしまったという話もありますが、そういう重要な儀式もあったということです。皇室が敬うのが三本足のカラス、八咫鳥であったということを確認しておいていただきたいと思います。

熊野の八咫鳥伝承

それでは、三番目の話に移ります。「熊野の八咫鳥伝承と広がり」について少し考えてみたいと思います。

円珍さんという三井寺の高僧が熊野で修行をします。そのときに熊野で道に迷い、大きな鳥が出て来て先導して本宮の祠に至ることができたという史料が出て来ます（『元亨釈書』、1322年）。要するに、神武天皇を導いた八咫鳥のように、円珍さんという天台修験の修行者を導く鳥として大きな鳥、おそらく八咫鳥のイメージが述べられています。そういう導きの鳥として出て来るとということです。

「山からすかしらも白く成にけり」という頭の白い鳥があったという史料が出て来ます（『いぬほし』、12世紀中頃）。熊野の異界観を示す話でしょう。

獵師を導いた八咫鳥が金色に変わったという太陽信仰にまつわる物語もあります（『神道集』、14世紀中頃）。これは本宮の神様が現れる、神社が祀られるという、いわゆる開創伝承の中に、八咫鳥が導いたという話が出て来るとということです。

湯峰東光寺の本堂には薬師如来が祀られていますが、その扉絵の日光菩薩が持っている日輪の中に三本足の鳥が書かれています。三本足に見えますか？ 若干お腹が出ているような気もします。ここだけの話、これを見るといつも「中村覚之助を顕彰する会」会長の中地完さんを思い出します。

神倉山にも八咫鳥が祀られていました。神武東征のときに神倉山に登って、それが天盤盾だという伝承があります。神倉山には中世から八咫鳥が祀られていたのだということがわかります（『熊野山略紀』、1420年）。

那智の滝でやはり八咫鳥に因んだ鳥をかたどった帽子をかぶる人が大勢いたということも示されています（『熊野詣日記』、1427年）。これは那智の滝で千日間修行する人たちです。那智の滝の麓に「靈光橋（れいこうばし）」という橋がありまして、そこに鳥帽子をかぶった千日修行の坊さんたちが集まっています。

『那智参詣曼荼羅』では、これはどういうわけか二本足なのですが、那智の本社の下の方に鳥が飛んでいます。お坊さんが座っていますが、左の方には鳥石というものが描かれています。これは現在でもございます。明日はご案内出来ると思いますが、神社でお祓いをしてもらうと、ここまで入れて

もらえることになっています。烏石という鳥の形をした石が現在でも残っていて、それが『那智参詣曼荼羅』にも描かれているということです。これは、室町時代の終わりか、江戸時代初めのころの絵図です。

有名な「那智の火祭」があります。「扇祭」と言われています。扇に那智の滝の神霊を付ける儀式を行う重要な行事です。烏帽子をかぶった権宮司さんが那智の滝の神霊をつけているところの写真をご覧ください。千日修行をした人たちがそういう儀式を特別に行うことができたということです。那智の滝の麓の「霊光橋」の上で、烏帽子をかぶった千日修行の人が紙を広げている絵をご覧ください。これは何をしているかということで研究者も関心を持っていますが、私は那智のお札、いわゆる「熊野牛玉宝印」を印刷して配っているところだろうという見解を示したことがあります。

「熊野牛玉宝印」は、日本第一有名なお守り札です。熊野三山から出されたのですが、那智のものは日本一の那智の滝の水で印刷するので有名です。真ん中に「日本第一」と書かれているくらいで、全国のこういったお札の中で日本第一有名なのが熊野牛玉なのだという史料もあります(『書札袖珍宝』)。これは神武天皇の八咫鳥をデザインしたのだということもちゃんと書かれています(『新宮本願文書』)。鳥をデザインすることによって非常に洗練されたデザインになり、日本第一有名になっていく。ですから真ん中に日本第一と書かれています。それくらい有名なお札でして、全国の熊野神社から偽物が出ています。江戸時代には幕府で裁判沙汰にもなっています。こちらが御本家ですからあまり真似をしてもらっては困るということです。

そんなお札が全国各地で配られたものですから、遊郭の女性にまで広がりました。このお札というのは、裏側は起請文、誓約書を書くのに使います。熊野の神様に誓って私は嘘は言いませんよというわけです。遊郭の女性がこれを乱発するわけです。私はあなたに惚れていますよという誓約書を何人も客が貰っていたという話です。それが「三枚起請」という落語になったりしているわけです。それくらい、八咫鳥は庶民にまで広がって全国的に有名だったのです。だから日本サッカー協会のマークに取り入れられたのだと思います。

太陽と導きの象徴

まとめとして、四番目の話にいきたいと思います。熊野の八咫鳥の神性、どういった意味を持っているのかということです。先ほど言いましたように、まさに太陽信仰そのものなんです。熊野は南山と呼ばれていまして、太陽が燦々(さんさん)と降り注ぐ場所でもあるということです。神武天皇がここにやって来て日本の国を開いた。皇室神にもなっている。神武天皇がここで再生をしたという再生信仰も関係があるのだらうと思います。

また、八咫鳥は異界の鳥ということがあります。熊野は霊のこもる場所、「隠国(こもりく)」なんてことを言われます。おそらく八咫鳥っていうのは、熊野のそういった諸々の魑魅魍魎(ちみもうりょう)の中から出て来る山の神の使いでもあったりするのだと思います。熊野は根の国、靈魂が漂いさまよっているような国なのだということも言われております。そういった信仰環境の中から生み出されたのが八咫鳥なののだらうと考えています。

そして、神の使いということです。八咫鳥というのはみさき神と呼ばれています。神様を先導する役割でもあるのだということです。神武天皇を導いたということとも関係があるのだらうと思います。神意を占うということがありまして、鳥に餌をやってそれを上手く食べてくれたら今年は豊作だという占い行事にも使われていますから、非常に重要な役割を果たしたということがわかります。まさに我々の魂を運ぶというような鳥なののだらうと思います。

それから、導きの鳥。これは先ほど言いましたように神武天皇を道案内したり、熊野詣の人たちを道案内する、そういった先達としてのイメージ・役割もあったということなのです。

このようにして見て来ますと、熊野というところは八咫鳥の生息環境に非常にふさわしい場所なののだらうというように私は考えています。そういったすばらしい歴史的、文化的な生息環境というもの

を、中村覚之助さんがよく理解していたから、日本サッカー協会のマークに八咫鳥を採用したらいいのではないかと考えていたのだらうと思っています。

サッカーは絶対に三本足なら有利ですよ。そして、皇室神でもありますから日本の象徴ですよ。日本は日の本で日出ずる国ですから、それでめでたい鳥でもあるということ。世界の中で建国神話に出て来るシンボル動物、それをマークにしていくということは非常に重要なことなのだらうと思います。先ほど見せていただいたら、ドイツやイギリスなど他の国のサッカー協会でも、ワシ（鷲）であったり、ライオンであったり、動物がシンボルにしているようですね。日本で建国神話に出てくる八咫鳥をシンボルにしたというのは、絶対に意義深いと思います。

鳥は賢い鳥です。狡賢い（ずるがしこい）というところもありますけれども・・・。また方向性をよく知っているということもあります。そんなことで、日本サッカー協会のマークというのは本当にうまくできているなと思います。それはおそらく中村覚之助さんの熊野文化の素養が何か影響を与えているのではないかと思います。まだ決定的なことは言えません。浜の宮でも熊野のお札を出しておりますので、そのすぐ傍で育った中村覚之助さんですから、そういった熊野信仰の「霊験パワー」の影響は非常に受けていたのではないかと、私は「飛躍的に」思っています。

ちょうど時間となったようでございます。ありがとうございます。

(中塚) どうもありがとうございました。

第Ⅱ部 ディスカッション

1. 八咫鳥と JFA のシンボルマーク

(中塚) せっかく話が八咫鳥の方に展開し、頭も神話の時代に向かおうとしているので、このまま休憩なしで、八咫鳥問題について、フロアを交えて意見交換していきたいと思います。

会場には、日本サッカー史研究会員で、フットボールの切手収集家の小堀さんがいらっしゃいます。小堀さんが諸外国のサッカー協会のシンボルマークを集めてこられたものがあるようですが、牛木さんからご紹介いただけますか。

(牛木) 小堀さんを紹介したいと思います。小堀さん、ちょっと立って下さい、すみません。サッカーの切手の収集では日本有数の有名な方で、サッカー切手の本も出されていますし、展覧会などをアレンジしてサッカー切手展などをやったりします。何人かそういった切手収集家の方がおられるのですが、その中でもっとも優れた方です。その方から提供してもらったものをご紹介したいと思います。

小堀さん、これは三年前のドイツのワールドカップのときにドイツでお求めになったのですよね？

(小堀俊一) フランクフルト市内の本屋の店先にあって、そこで購入しました。

(牛木) フランクフルトの本屋の店先にあったもので、これは葉書なのです。閉じて文章を書いて宛名を書けば送れるようになっているのです。ドイツ大会に出場した国の図案が描いてあって、日本のものはカラスがいてボールを掴んでいます。こちらはブラジルで豹なのでしょうか、虎なのでしょうか？ もちろんボールがありまして、非常にどう猛そうです。イングランドはもちろんライオンです。ボールがここにあって襲っている。これはなかなか面白い。けどどライオンや豹だろうが虎だろうが、カラスにとっては飛んでいけばいいですから別に怖くない。しかし、強敵がいますね。それはドイツで、ドイツは驚です。ドイツの国旗をご覧になったらわかります。これは、カラスにとってはちょっと怖いですね。カラスは森の中に隠れた方がいいかなと思います。

(中塚) このように各国のサッカー協会のシンボルマークにはいろいろな動物、鳥が描かれているわけです。では、先ほども山本さんのところで出て来ましたが、なぜ日本サッカー協会のシンボルマークがカラスなのかと。もしかすると、このあたりのご出身であった中村覚之助さんの意向が何らかの形で反映されたのではないかという推測ができそうな気がするのですが。

(牛木) 山本さんのお話を聞いていて、カラスを日本サッカー協会がシンボルとして採用するのは理由のあることだなと思いました。こういうふうに関国のサッカー協会のマスコットを並べてみると、イングランドがライオンであって日本がカラスであることに、なんの違和感もありません。日本の国旗は日の丸ですから、日の丸を象徴するような生き物を使うとすれば、日の中にいる八咫鳥は国旗とも関連があって非常に面白いと思いました。それから、神の使いで戦いの先頭に立って案内するわけですから、やはり国際試合に使うのには非常に適当なシンボルではないかと思います。これを日本サッカー協会のマークにしたのは間違いではもちろんないと思います。

これがマークとして採用されたのは昭和6年だということはわかっております。私の生まれる1年前です。そして、それをデザインした人(日名瀬実三)もわかっています。だけど、誰がこの三本足のカラスを日本サッカー協会のマークにしようと思いついたかは、私の知っている限り、まったくわかっておりません。だから、それを知りたいと思って、今日もなにかヒントがないかなと思って来て

いるわけです。

中村覚之助さんよりもちょっと下で、内野台嶺さんという人がおります。中村覚之助さんは、ずっと生きておられれば、日本の協会設立にも貢献して非常に大きな仕事をしただろうと思うのですが、早くに亡くなられてしまてできなかったわけです。後輩の内野台嶺さんはサッカー協会を作るのに非常に政治的に苦勞をされた方です。その内野台嶺さんがこのアイデアを出したのだということを言う人もいるのです。内野台嶺さんは東京高等師範学校ですし、中村覚之助さんから熊野の話をもし聞いていけばなおさら、そういうアイデアを思いついたということはあるのではないかと思います。これはいずれも確証もないし、ちょっと昭和6年から明治30何年まで遡ると間が空き過ぎるという問題もあります。直接のつながりがあるかないかはともかく、内野台嶺さんの頭の中にそういう考えがあったとしても不思議ではないと思います。

いまの若い人たちのなかには八咫鳥そのものを知らない方もたくさんいます。八咫鳥が神武天皇を先導したという話は、我々のような、戦時中に旧制の小学校を卒業した年代の人はみんな知っているのですが、それ以降の人は学校で習ったことはないですよ。学校で教えるということはないでしょう？

(森岡) 私は昭和9年生まれで、戦争が終わったときに5年生でしたけれども、知りませんでした。

(牛木) 勉強しなかっただけでしょ(笑)。

(森岡) いやいや、でも教育勅語の「朕惟ふに我か皇祖皇宗國を肇むること宏遠に・・・」というのは最後まで言えます。

(牛木) 森岡さんは、卒業後は新聞記者になって相撲やプロレスを担当しましたし、私も新聞記者になりました。実は、お互い新聞記者になる前、彼は東京教育大学で、私は東京大学で、サッカー部を代表して学連でいっしょに仕事をしていたのです。だから、非常に深い。半世紀にわたる悪因縁なのです。

(森岡) 喧嘩ばかりしていましたよ(笑)。

(牛木) そういうわけですから、八咫鳥を取り上げられたのはおかしくないと思います。今の人からみれば突拍子もないと思われるかも知れないが、当時の人びとにとってはそれほど突拍子もないアイデアではないと思います。

2. JFA マーク発案者・内野台嶺と中村覚之助

(中塚) いかがでしょうか。地元の方から、もしくはスポーツ史の研究者も何人かおられますので、何か補足できるような情報があればいただきたいと思うのですが。

(篠田昭八郎) 岐阜の篠田です。八咫鳥の件ですが、内野さんが原案を作られたということは資料には残っています。内野先生は高等師範の教官をやっておられたのでしょうか。だから、牛木先生がそこらあたりの関係をもっと詳しく調べていただけるとありがたいという気がします。それが第1点です。

第2点は、昭和41年に高師先輩の堀桑吉先生に会ったときの話なのですが、その堀桑吉先生が1年生のときの4年生が中村覚之助さんだったのです。中村覚之助さんはどうだと聞いたことを未だに

覚えています。彼が全部本を訳して各寮を回って（フットボールをしよう）勧誘をしたと。勧誘して集めたことについては、この参考資料に出ていた通りのことを彼（堀）は言っておりました。（そのときに）はじめてサッカーをやったということをおっしゃいました。当時、東京高等師範に入った人というのは千差万別で、師範学校を卒業して入った、教員をやってから入った、あるいは中学校を卒業してすぐ入ったというように、年齢差が非常にあって、中には子持ちの人もおったと聞いております。そういうことで、千差万別な人たちが寮生活を送っていたということも事実だと思っています。内野先生の件については、牛木先生にもう一回詳しく調べていただければと思っています。以上です。

（森岡）今の篠田さんのことを引き継げば、確かに内野台嶺の高等師範在学は明治 40 年前後です。その後、高等師範の教授として残っていますから、あるいは内野さんの発案で八咫鳥が日本サッカー協会のシンボルマークになったということもあるのではないかという気になりました。

（五島祐治郎）元神戸大学に勤めていた五島と申します。八咫鳥のマークと内野台嶺さんという関係は、森岡さんや篠田さんと同じような共通の認識くらいしかありません。内野台嶺さんと中村覚之助さんの関係は、この資料を見ますと、中村覚之助さんは明治 37 年 3 月に東京高等師範学校を卒業、内野台嶺さんは明治 38 年に東京高等師範学校に入学されております。内野台嶺さんは、東京高等師範学校を卒業してすぐ豊島師範学校に勤められまして、当時は大体 2～3 年くらいでまた母校に戻るような形の先生方が多いのですが、数年経って東京高等師範学校に戻られました。

内野台嶺さんは、昭和 11 年の「アサヒスポーツ」の第 14 巻第 2 号に、「日本スポーツ古事記 揺籃時代の蹴球」と題して、昔のことを書いています。内野台嶺さんは、明治 38 年に入学して、明治 41 年に横浜外人クラブ（YC&AC）と試合をやって初めて勝ったときのメンバーです。そのころの蹴球部の状況などをふりかえって、次のように述べています。当時の蹴球の場合は、まず一番うまい人・強い人がとにかくフォワードにいて、次に、後ろの方で守れる人がいて（フルバック）、今のミッドフィールダー、ハーフバックには一番へたな人がやっていました。ところが、内野台嶺さんは、蹴球部の部会で、ハーフというのは攻めと守りにかかわる重要なポジションではないのかということをおっしゃられたそうです（内野さんはレフトハーフ）。「アサヒスポーツ」に書かれた昭和 11 年の段階では、ハーフバックの大切さが叫ばれ、非常にサッカーのなかで重視されて来ていました。

内野台嶺さんと中村覚之助さんとは、在学年度はちょっと違います。内野台嶺さんは曹洞宗のお坊さんでした。私の家も曹洞宗なので、山本さんに一つお伺いします。最初のところで中国の『淮南子』で太陽の中に鳥が住んでいるというのがあったと思うのですが、宗教とそのあたりのところの関係で何かわかるようなことがあったら教えてください。内野台嶺さんが日本サッカー協会のカラスのマークを作った、デザインしたというところにも、かかわってくるのではないのでしょうか。そのあたりに、一つ解く鍵があるのではないかというのが最近の私の考えです。

（山本）宗教家の内野台嶺先生だったら、かなり教養人でございますので中国の古典も勉強しているでしょうし、神武東征についてももちろん勉強されて詳しいでしょう。日本宗教史の中で八咫鳥というものが非常に有名な存在だということはかなり認識があったのだろうという気がしますので、内野さんが発想されたということは有力だろうと思います。ただ、まだまだ決定打とまではいきませんので、中村覚之助さんとかかわりがどうであったのかを含めて、これからもっともっと追究する必要があるだろうと思います。確かに宗教的側面からは非常に関心の高い動物であったことは確かだろうと思います。

（中塚）先程の話では、内野さんは明治 38 年に入学されたということでした。中村覚之助さんが亡くなられたのは明治 39 年です。そうすると、内野さんが在校中に中村覚之助さんが亡くなられたという

報が来ているわけで、もしかするとそういうところに関わりがあったのかも知れません。

3. シンボルマークの由来は熊野の八咫鳥—JFA ホームページの修正を！

(中塚) 問題を残したままではありますが、日本サッカー協会のホームページを見ると、三本足のカラスの由来は中国の古典のかくかくしかじかとは出てないわけです。本当はそうではなくて、もっともっとしっかりしたルーツがここ(熊野)にあるのだということは何らかの形でアピールし、日本サッカー協会のホームページを書き換えてもらうぐらいの活動はする必要があると思います。(拍手)

(牛木) いまの話は非常に重要だと思います。去年亡くなられた、日本サッカー協会の元会長、長沼健さんはここにも来られて中村さんのお墓にもお参りされて、よく知っていました。長沼さんは日本代表チームの監督でしたから、外国へチームを連れて行ったときや、2002年のワールドカップの招致活動などで外国へ行ったときに、外国の人から、日本サッカー協会のマークである三本足のカラスは、いったい何なのかと聞かれたそうです。そのときに、これは中国の古い伝説でこうこうだと言って説明すると、相手の人は、なんで中国のものが日本の胸のマークかと言うわけです。そうすると、彼はぐっと詰まって、なにも答えられなかったそうです。

三本足のカラスのもともとのルーツは中国の古典かもしれないが、このマークのルーツは熊野の御神鳥の八咫鳥であって、日本の国旗は日の丸だから太陽の中の鳥をシンボルにしている。そういうことをちゃんとマークの説明の根拠にするべきであると思います。いま中塚先生が言われたように、ホームページを書き換えるべきであると思います。

一つ余計なことを言います。このマークは昭和6年にできたのですが、その後ずっと胸のマークとしてつけて来ました。戦後になって、レプリカユニフォームといってチームと同じユニフォームを作って商品として売られるようになりました。それは日本サッカー協会の収益となるわけです。ところが、日本サッカー協会がそれを売ろうとしたところ、このマークがすでに商標登録されていました。商標登録したのは神戸の衣料問屋の人で、戦前から商標登録していたということです。商標登録をしたときにすぐに異議申し立てをして、これは、われわれの創案したマークで、すでに広く知られているというふうに言えば、商標登録は認められなかったのかもしれない。しかし、登録されてからずっと放っておいたので、相手の既得権となってしまう。登録をしても使わないでいると権利は消えるらしいのですが、その衣料問屋さんは、当時は売れもしないのですが、1年に何着か作って店に出して、権利をずっと持っていたという話を聞きました。

日本サッカー協会がレプリカユニフォームを売ろうとしたら、その衣料問屋さんが異議申し立てをして、こちらに権利があると主張しました。日本サッカー協会はびっくりしましたが、これは裁判には勝てません。結局、話し合いをして日本サッカー協会が買い取り、いま権利は日本サッカー協会にあります。もっと自分たちのマークを大事にしなければいけないということを、ひとこと、付け加えておきます。

それからもう一つ。これは私の変な提案です。東京にも熊野神社がいくつもあります。各地の熊野神社で日本サッカー協会公認のこのマークのお守りを売っていて、買ってくる人もいます。でも、ここ熊野が本物だということをもっと宣伝しなければいけないのではないかと思います。といって日本代表チームが毎回試合のたびにここに来てお参りするのはいへんです。私もきのう東京から夜行バスで来て、ちょっと大変だと思いました。でも、せめて日本サッカー協会の会長は、就任したらまず熊野三山にお参りするべきではないかと思います。総理大臣は就任すると伊勢神宮にお参りするでしょう。日本サッカー協会の会長が一人だけで来るのであれば、車で来ればいいのですから、たいしたことではないでしょう。ここに来て熊野三山にお参りして、日本のサッカーの将来を導いてもらっ

た方がいいのではないのでしょうか。いま思いついたことですが・・・。(拍手)

(中塚)ありがとうございます。具体的な提案がいくつか出て来ましたので、これはぜひ実現に向けて、各方面で鋭意努力して行きたいと思います。

4. 中村覚之助の業績—日本サッカー殿堂入りを！

(中塚)もう一度最初のテーマである、今回の主人公の中村覚之助に戻って、残り 25 分、人物像に焦点を当てていきたいと思います。

最初のプレゼンテーションで時間切れになってしまいましたが、牛木さんからは中村覚之助の優れた点ということで、レジュメの中にもいくつか盛り込まれています。牛木さん、そのあたりの補足からお願いします。

(牛木) 皆さんにお配りしてある「中村覚之助の略歴」をご覧ください。最初に出ている写真が中村覚之助さんです。若くして亡くなったわりには格好つけ過ぎているという感じですが、当時はこういうふうだったのでしょう、しかも中国に行かれたわけですから。

3 枚目のところに写真が一つ載っています。先ほど言い忘れたのですが、日本サッカー殿堂入りすることが当然であるという理由の一つは、日本で初めてアソシエーション・ルールによるフットボール、つまりサッカーの対外試合をやったということです。東京高等師範学校の中でやった「うちうち」の試合ではなく、外との初めての試合でした。横浜外人クラブに挑戦状というのを送って試合をしたわけです。そのアレンジ、交渉などをすべて中村覚之助さんがやったらしいのです。これは当然サッカー殿堂に入る価値があると思うのです。

そのときのメンバーの写真がこれなのです。これは中村統太郎さんのお宅にあった写真です。この写真がどうして見つかったかという話を聞いて、私は非常に面白いと思いました。日本サッカー協

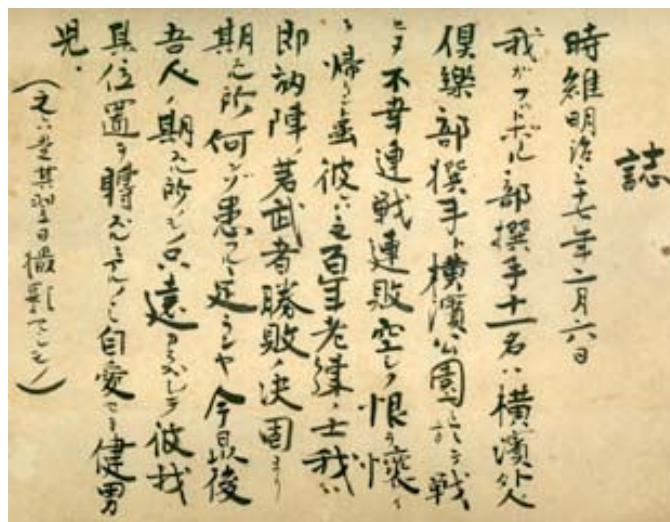
会の理事をやっていた轡田三男さんという早稲田大学の先輩がおられて、私は非常に親しくさせていただきました。その方の息子さんの轡田隆史さんが朝日新聞の論説委員などを勤めておられました。その轡田隆史さんが書いた本の中に、この東京高等師範学校と横浜外人クラブの試合のことが書いてあった。書いてあったのを見ると、その試合は明治 37 年 2 月 6 日に行われたとあった。それをたまたま中村統太郎さんが読んで、これは家にある写真の裏に書かれている「時維明治 37 年 2 月 6 日」と同じなので、ひょっとしたらこの写真はそれではないかと思い連絡したのが、この写真が世に出た最初だということです。写真の裏にちゃんと書いておくことがだいじですね。その後に篠田先生が、これと同じ写真をもう 1 枚見つけられたらしいのですが、それには裏に名前が書いてあるだけでした。

私は、中村さんのお宅から出てきた写真を見せてもらったときに非常にびっくりしました。びっくりした点が二つあります。この写真は、いまみたいに写真が普及しているわけではないですから、試合に行った記念にその場で撮ったわけではありません。カメラも普及していませんし、どこでも簡単



明治 37 年 2 月 6 日 日本初のサッカー試合の記念写真 (上の段向かって右から 3 人目の学生服、学生帽の人物が中村覚之助氏) (那智勝浦町 HP より)

に写真を撮れるわけではありません。そんなことは当時できません。当時、写真は写真館に行って撮るものでした。先ほどの中村覚之助さんのフロックコートの写真も、実は中国の済南の写真館で撮ったものです。この写真も実は試合の行われた日に撮ったのではなくて、翌日に横浜から東京に戻って来て神田の江木本店という写真館に行って撮っています。それは写真の下の方にマークが付いているからわかります。そして、裏に翌日撮ったのだということが書いてあります。このユニフォームもわざわざ作ったらしいのですが、ユニフォームを着て横浜で試合をして東京に帰って来ました。そして、翌日皆でユニフォームを持って写真館に行って、着替えて写真を撮っているわけです。わざわざこんなことをしたという



上の写真の裏面（那智勝浦町 HP より）

ことは、自分たちが横浜に行ってやった試合がどんなものであったか、これは意義のあるものであった、日本で初めての対外試合をやった、それは記念にして後世に残すべきものであるということを自覚していたからなのです。そして裏を見ると、大敗をしたけれどもそんなに心配することはないのだ、自分たちは今回負けたけれども将来はこうあるべきだということが書かれています。

写真館に行って撮ったということは、自分自身がやったことに対する歴史的意義というものを自覚しているということです。自分たちは負けたけれども前向きに将来こうするべきだということを書いているのです。これは中村覚之助という人の非常に優れたところです。だから、どうしても日本サッカー殿堂に入れるべきだと思っているわけです。

（篠田）当時は、今のように選手交代は認められていませんでした。だから、ユニフォームを着た人が11人と、3人の学生服を着た人が写っているのです。この3人の学生服姿の中に、中村覚之助さんと堀桑吉さんがいらっしゃいます。あと一人は、松島秀保（旧落合）さんです。当時は11人だけで試合をして交代ができなかったのです。そういったことも含んでいただければと思います。

（牛木）90分の試合だったのでしょうか。当時はよく70分の試合が行われていたのですよ。

（篠田）それは間違いありません。私が堀桑吉先生と対談した時に、先生は必ず90分、90分と言われるのです。あの人は陸軍幼年学校の教官をやっていた時や、あるいは師範学校の教員をやっていた時の話でも、90分間の時間が終わってすぐ帰れるからサッカーはいいのだよと言っておられたのが、対談の中に残っております。

（中村統太郎）この写真が載っている試合は、30分ハーフの60分で行われたとのこと。資料に載っております。

（篠田）私が堀桑吉先生に聞いた時は、いつもそう言うておられるのです。時間の詳しいことはわかりませんので、申し訳ないです。失礼しました。

（森岡）付け加えます。今年104年目の試合を横浜外人クラブ（YC&AC）と筑波大学がやりました。ここ数年負けたことはありませんが、45分ハーフではなく30分3本の試合です。それはたくさんの

選手を起用しようという意図からです。もう横浜外人クラブは、実力的には筑波大学のサッカー部の敵ではありませんが、友好と歴史を重んじて、まだやっております。

5. 中村覚之助とサッカー、スポーツ、博物学

(中塚) 私が中村覚之助さんのお名前を初めてお聞きしたのが、3年ほど前の日本フットボール学会でした。いま発言された篠田さんが「日本サッカー事始」というシリーズで10回くらい発表されているのですが、その中で中村覚之助さんの話をしてくださいました。ユニフォームを着ていないこの人が中村覚之助だと、いまの写真も紹介してくださいました。「彼はプレーをしたことがないのにキャプテンなのだ」ということでした。とても気になりました。いまの感覚で言うと、ふつうサッカー部のキャプテンは、サッカーの上手な人とか、サッカーのことがよくわかっている人になるものでしょう。ところが、プレーしたことのない人がキャプテンをやっている。これはどういうことなのだろう、と思ったわけです。だけど、その試合の1年前には本を書かれているわけですから、サッカーのことについて詳しいはずです。しかも、人集めもこの方を中心になされている…。

この方は一体どういった能力をお持ちだったのだろうか。人を引き付けるものを潜在的にお持ちだったのだろうか。やはり、このあたりが気になるところです。フロアの方から補足などをいただければと思います。

(篠田) 私の聞いた範囲内では、中村覚之助さんが各寮を回って勧誘されたとのこと。そこで1年生だった堀さんは賛成したと、この資料に書いてあるのと同じことを聞いております。もし必要であればテープも残っております。

(中塚) 先ほど牛木さんも言われましたが、きょうの午前中、中村覚之助さんのお墓参りをし、育ったお宅、つまり中村統太郎さんのお宅にお邪魔し、覚之助さんの遺品をいくつか見させていただきました。大学時代の博物学の授業ノートはものすごくきめ細かく、博物学ですから細胞の絵や植物の絵をきれいに色分けして描かれ、説明が書かれている。そういうものがごそっと残っています。そのことだけでも、ものすごい勉強家で、しかもものをまとめる能力というか、書かれることも多分非常に上手だったのだらうと思います。そういった何か特異な才能をお持ちの方だったのかなと思いました。中村覚之助の人物像を、ご子孫の立場から中村統太郎さん、いかがでしょうか？

(中村) 私も覚之助がサッカーをやっていたことは親父から聞いておりました。私自身サッカーをやったことが全然ありませんので、特にあまり関心がありませんでした。Jリーグができてサッカーがメジャーなスポーツになって、いっぺんちょっと調べてみようかなと思い、それから始まったような状態です。親父からは、勉強もよくできたしスポーツも万能だったというような話ぐらいしか聞いておりません。親父もこういうことは全然知りませんでした、筑波大学に行って調べたら、いろいろな資料が出て来たのが平成10年くらいだったのでしょうか。親などからは全然深く聞いておりませんので、私もあまり詳しいことはわからないような状態です。

(中塚) 中村さんのお宅で見させていただいた資料の中で、嘉納治五郎の名前で発行された、水泳が優秀であったことを表彰する書状が出て来ましたが。

(中村) 家のすぐ前がこの那智の浜ですから、水泳はかなり得意だったようです。よくこの浜で水泳を教えてもらったというような話は、私の大叔母などから聞いております。

(牛木) ちょっと付け加えますと、スポーツが不得意ではなかったことは、水泳の表彰状のようなものを見て思いました。なぜ自分でプレーしなかったのかということはよくわからないところです。やればできたはずです。現在の言葉で言えば、ジェネラル・セクレタリーみたいな役割をやっているわけです。いまマネージャーとかセクレタリーと言うと、下働きのように日本語では取れますが、チーム全体を統括するような立場で仕事をしているわけです。なぜそのような仕事をしたかという、これはまったくの推測で、間違っていたら篠田さんや五島さんに直していただきたいのですが、坪井玄道が10数種のスポーツについて欧米で観て資料を持って帰った中で、7つくらいのスポーツを日本でやらせようということをしたというふうに聞いています。そのときに、持ちかえった本を与えて、これをもとに研究せよということで分担させたに違いないと思います。生徒の中で外国語のできる人を選んだに違いありません。できなければ読めないわけですから。今日のたくさんのノートを見ても、非常に勉強して外国語もできたということは明らかです。能力があったことは確かです。それから、文章を書くのが上手な人、好きな人でないといけません。この写真の裏に書いてあるように、あるいは東京高等師範の校友会誌に書かれた当時のものはほとんど覚之助が書いたと思われるのですが、書くのが好きだった人だと思うのです。覚之助は書くのが好きだったのです。語学力があった、書くのが好きだった、文章力があった。その上にリーダーシップがあった。ということがあって、坪井玄道は水泳部ではなくてサッカーの仕事をさせたのではないかというふうに私は推測しています。そして、実際それに値する人だったということは明らかです。他のスポーツでも同じようなことが残っているのか、つまり坪井玄道さんが持って来たスポーツを伝えた中で、他のスポーツでも同じような人がいたのかどうかを、私は寡聞にして知りません。それだけ中村覚之助は偉かったのだと思っています。

(森岡) 当時のクラブに主将、主務という名前はなく、主事ですね。これは監督であり、キャプテンであり、マネージャーであった。役職ははっきりしています。能力のことはわかりません。

6. 師範学校におけるクラブ制度

(篠田) これは私の推測ですが、中村覚之助さんはどこかのクラブに入っていたことは事実であろうと思うのです。というのは、当時の師範学校の沿革を見ておきますと、当時高等師範を出て師範学校の校長になった人の方針などを見ますと、寮生は必ず一つのクラブには入りなさいとっております。全寮制になっておりましたから、たぶんそれは高等師範の考え方からきていると思うので、中村覚之助は、他のクラブに入っていたけれども、サッカーをやったかたではないか。これは私の推測ですが、そういうような気がするのです。

(牛木) それはフットボール部、蹴球部に入っていたのではないのですか？

(篠田) いやそうではなく、その前の話です。明治の時代、愛知師範では全員クラブ制度だったので、その校長の出は東京高等師範なのです。当時の高等師範出の人は、いま言ったように、たとえば柔道であり剣道であり弓道でありというように、どこかのクラブの一つずつ入っている。ただし、師範学校では、団体スポーツは対外試合をするからやめなさいといわれた時代があった。その当時は、クラブは個人スポーツを中心としていて、いまで言えばウォーキング部のようなものがあったのは事実だと思います。

(牛木) 篠田さんはよくご存知だと思いますが、それはおっしゃる通りで、当時は校友会みたいな構成は全員が会員で、スポーツに限らずどれかをやりなさいということがあって、それは当時の新しくできた中等学校でもみなそういうふうになっています。いまみたいに自由に何もしない、いわゆる「帰宅部」は許されなかった。実際はどうかわかりませんが、そのように、文章では残っています。当時中等学校や師範学校などの校友会にいろいろな部ができています。学校ができると同時に校友会を作ります。そのときに、撃剣部いまでいう剣道部、柔術部いまでいう柔道部、弓術部いまでいう弓道部、はだいたい入っています。その他に、泳ぐ方の水練部というのも入っています。武術の三つは大体入っています。ヨーロッパ系のもので割と早くから入っているのが漕艇つまりローイングと、テニスなのです。その他に規則上、校友会の会則にフットボール部、フットボール部というのが入っているのですが、これは実際には行われていなかったケースが多かったようです。もちろん、柔道、剣道、弓道は行われています。ですから、中村覚之助さんが、ほかのクラブに属していたということはあると思います。そういう可能性は十分あるというふうに思います。

(篠田) まず個人種目をやっていてそれだけであき足りないから、フットボールの本を訳してやったという形になったような気がするわけです。

(五島) 高等師範学校に明治 29 年、運動会が設置された。8 つの部があって、1 日 30 分以上どこかの部に属して、あるいは一つだけでなく他の運動をやるのだということ森岡さんが学生時代におっしゃられた。そのことが頭にあって、だいぶ後になってからいろいろとそのあたりのところを読んでみました。これを時系列から見ますと、明治 29 年に運動会が認められて 1 日 30 分以上どこかの部に入ってやると、一人で一つの部だけでなく今日は何々の部、翌日は何々の部という人もいたことでしょう。29 年にできたものが、だんだんと年月を経るにつれて、一つの部で多くやるようになって技術を考えていた人たちもいたと思います。(年月とともに部活動が変化していったことが考えられる)。本日、ここにある資料で略歴を見ますと、中村覚之助さんは、明治 33 年に高等師範学校に入学です。坪井玄道先生が、中村覚之助さんの訳書の序文でフットボール部の委員が英文の書を翻訳して編していると述べられておられる。それに対して訳者の中村覚之助さんは、凡例で坪井玄道先生の指導と校閲をいただき、学友の橋本吾作君と上田芳郎君の多大なる助力の労に謝すと記している。要するに、中村覚之助は最初 1 日 30 分以上の部の委員をされておったと思います。ちょうど明治 34 年の 10 月に、寄宿舎などの寄合会と運動会とが合併して校友会と改められています。(明治 29 年当時は、帝国大学は一つ、高等師範学校も一つだったのですが、明治 30 年、京都に帝国大学ができ、明治 36 年、広島に高等師範学校ができました。この段階で東京帝国大学、東京高等師範学校と改称されたわけです)。このように 1 日 30 分以上の部活動だったのが、校友会となって、その中で新しいフットボール部ができたわけです。中村覚之助さんは、そのところでフットボール部の上級生として本を読んで、イングランドから坪井玄道先生が持ち帰った本が 4~5 冊あるわけですが、それらに目を通して、なおかつ、坪井玄道先生から指導を受けて、最終的にはこういう形でフットボールの本を一冊出したわけです。時系列からいきましたら、運動会から校友会に改まった、新しい校友会としての部が変わった段階のところそういうけじめをつけられた。牛木さんがおっしゃられたように、中村覚之助さんという方は、そのときどきのいろいろな推移をきちんと捉えて、きちんと記述をして残しておこうとしたのではないかというのが、私の考えです。

(森岡) 中村覚之助がサッカーをやっていたかやらないのか、やっていたと思います。ただあまり上手くなかったので横浜外人クラブとやるときはレギュラーを外れたのか、それとももう別の仕事で忙しくて出られなかったのかといったようなところではないでしょうか。

(篠田) ちょっと今のことに反論したいのですが。私が堀桑吉先生から直接聞いた話では、「やっておりません」とはっきり言われております。サッカーの本を書いて、プレーに対する注釈はしたというふうに聞いております。

(森岡) その通りかも知れませんが、何せ 100 年以上も前ですからね。篠田さんが堀桑吉先生のお話を聞いたのは、堀先生が 90 何歳のころでしょう？

(篠田) 80 歳です。

(森岡) まあこのあたりはちょっとわからないですね。わからないことだらけです。その中で真実に近いものを見つけて行こうというのが、このセミナーの趣旨でもあるのです。

(牛木) 堀さんの書いた原稿が東京教育大学のサッカー部史に載っているのですが、相当に老化されたことが明らかな内容なのです。いろいろな資料をみるときの資料価値の判断は非常に難しい。資料批判は難しい問題があります。堀さんの記事に限らないのですが、いろいろな話が出ましたから、まるまる、うのみにはできないということは付け加えておきたいと思います。

7. おわりに

(中塚) ありがとうございます。このまま続くと大変なことになりそうな気がします。フロアの方も、聞きたいことが山ほどおありではないかと思いますが、残念ながら予定の 5 時を過ぎました。続きはこのあと場所を変えて、懇親会でより深くやっていただければと思います。せっかくだから、最後に一言ずつ、演者の方からコメントをお願いします。

(山本) きょうは先生方、ありがとうございます。本当に中村覚之助さんの日本サッカー史の中での位置付けを、我々も改めて確認できたように思います。本家熊野の八咫鳥が、日本サッカーの中できちんと認知されることを願っております。ありがとうございます。

(森岡) 皆様のお子さんはもうちょっと年齢が過ぎているかと思いますが、お孫さん、あるいはひ孫さん、ぜひ筑波大学のサッカー部へ来させて下さい。お願いいたします。

(牛木) いまですね、子供が少なくなったので、大学も志願者の奪い合いをやっているのです。私の出身校の東大でも、サッカー部があります。90 年の歴史があります。筑波大学に行かなくても東大に来てサッカーはやれます。東大に来てください。

(中塚) 最後は大学同士の争いになりつつあります。とにかくここでいくつか課題も見えたと思います。課題と言うか、アクションプランの目標かも知れませんが、中村覚之助をなんとか殿堂入りさせること。そして八咫鳥のルーツは熊野であることの再認知、それから歴史研究の難しさといくつかの課題、このあたりを皆さんで少しずつ情報を出し合って進めて行ければと思います。今日のシンポジウムがそのきっかけになれば、シンポジウムとしては良かったのではないかと思います。また機会がありましたら、もちろんこの後も含めて今後ともよろしくお願いします。それでは、演者の方々に改めて大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。(拍手)

(2009 年 6 月 29 日)

補足①—高師卒業後の中村覚之助に関する推測

篠田昭八郎（茗友サッカークラブ会員）

篠田が昭和30年前半、上田千曲高に在職のころ、当時の高等師範卒業生で信州大学教官、長野県立高校の管理職の先生方との話の中で聞いたところでは、高師では3月15日の卒業式の当日、赴任先が講堂に掲示され、そこに赴任した。当時の満州、中国、台湾、樺太の学校に行った場合の初任給は、国内100円より30%アップの130円とのことだった。

卒業生で優秀な生徒は師範学校、次いで男子中学校の順で配属され、官費で教育を受けているため個人の希望は認められなかったとのこと。

中村先生については、校友会誌8号雑文に「盲腸炎で渡満の可否も気遣はれたが経過も順当で意を決し山東師範学堂へ行かれた」との記事がある。

推察ではあるが、先生は卒業間近に大病をされ、東京を離れられず、東京府立一女に着任、主治医の治療が必要とのことで治療を続け、その後、上記の学校に赴任されたのではなかろうか。

(2009年5月5日)

補足②—中村覚之助が教鞭を執った清国山東省済南師範学校について

笹原勉（サロン2002会員。北京在住。学生時代に山東大学に留学）

1) 山東省済南師範学校の沿革

同校は山東省済南市にある、小学教師養成を専門とする教育学校である。私が同地に留学していた80年代にも同じ名前が存在していたようだが、場所が遠く（というより、サッカーの試合で対戦しなかったため）、存在を知らなかった。

同校の前身は、1902年（清光緒28年）創立の山東大学堂師範館。

山東大学堂というのは、まさに私の留学先である山東大学の前身なので、山東大学と山東省済南師範学校は兄弟関係にあると言えよう。

話を戻すと、師範館は翌1903年に山東大学堂から独立して山東全省師範学堂となる。中村覚之助氏が赴任された1905年（明治38年）には、この校名だったはずである。

その後、幾多の変遷を経て、1950年に山東省済南師範学校となり、現在に至っている。

2) 山東省師範学校と東京高等師範学校の関係

山東大学堂師範館が設立されたのは、北京や日本に山東省の学生を派遣するためであった。1903年には、50名の学生が日本の弘文学院に留学に赴いている。

この弘文学院というのは、東京高等師範学校の校長を務めていた嘉納治五郎氏が設立した、在日留学生のための学校である。ときの文部大臣兼外務大臣西園寺公望が、清国公使の要請を受け、嘉納氏に設立を依頼したらしい。

弘文学院での留学経験者には、小説家の魯迅、中国共産党設立メンバーの陳独秀、中国国歌「義勇軍行進曲」作詞者の田漢などの有名人がいる。ちなみに田漢氏は弘文学院卒業後東京高師に入学しているので我々の先輩に当たる。

嘉納治五郎氏がこれらの中国人留学生の教育に工夫を凝らした。一方、学外では、清朝打倒の革命運動が広がっていた。中村覚之助氏が訪中した1905年には、日本にいた孫文が「中国革命同盟会」を組織し、1911年の辛亥革命につながっていく。この同盟会には山東省出身者が53名参加していたが、多くは師範館/師範学堂からの留学生であつたらしい。

中村覚之助氏が山東全省師範学堂（山東省済南師範学校）に派遣されたのも、弘文学院を介して同校と東京高等師範学校及び嘉納治五郎氏との関係があつたからであろう。

(2009年5月6日)

補足③ー協会マークをデザインした日名子実三のモチーフについて

福島寿男（日本サッカー史研究会、4月27日の月例会で報告）

昭和6年に協会の「三本足のカラス」をデザインしたのは、日名子実三である。当時、著名な彫刻家で、とくにスポーツ美術の第一人者だった。大日本蹴球協会の仕事以前にも実績があった。近年、日名子についての研究が進み、本なども出版されて新しい事実が分かってきている。

日名子は、蹴球協会のマークのほかにも、日本の建国神話をモチーフにした作品を多数残している。昭和14年の「支那事変従軍記章」には八咫鳥がデザインされている。このカラスは二本足だが、制作過程の初期の粘土原型を写した貴重な写真が残っており、原案は三本足の八咫鳥だったことが分かる。また昭和12年の東京市連合青年団「第十七回陸上競技大会」のメダル原型が現存するが、このメダル部分は八咫鳥が神武天皇の肩に留まった図案である。（広田肇一『日名子実三の世界：昭和初期彫刻の鬼才』、思文閣出版、2008）

これらを見ると、協会標章のデザインのモチーフが中国の古典由来ではなく、記紀神話（神武東征）由来の八咫鳥であることは明らかであると思われる。

日名子の再評価が進んでいるので、今後、関係者（遺族など）から新史料（蹴球関係の手紙など）が出てくる可能性がある。